学習院大学　法学部政治学科　１年
学籍番号　11-012-274
山崎みず穂

夏季休業中のボランティア活動報告書―ベトナム ハノイ

１．ボランティアの概要

9 月 6 日から 14 日まで、脳や体に障害の人々（主に子供）や、貧しくて家では育てられないために親元を離れて暮らすことになった子供たちが集まる、宿泊施設兼学校の Hai Duong Welfare Center、ベトナム最貧層の人々が生活する Fisher Village、ベトナム市内にある大学を巡り、子供たちに英語や数字を教えたり、一緒に遊んだり、旧暦 8 月 15 日に行われたベトナム最大のお祭りである Mid Autumn Festival の準備を手伝ったり、現地の大学生と環境について話し合ったりした。また参加したボランティアの国籍も多様であり、フランス・アメリカ・スペイン・韓国・インドネシア・日本から集まった 15 人の男女と、現地ボランティア 4~7 名で活動した。

２．現地での生活

〈Hai Duong Welfare Center〉

最初に滞在した Hai Duong Welfare Center にはシャワーがなく、トイレも自ら水を流し込んで汚物を処理しなければならなかった。もちろんトイレットペーパーなどない。その施設にいた子供たちも、体をきれいにするという習慣を持ち合わせていなかったようで、いつも汗の匂いとべたつきを感じたし、毎日同じ薄汚れた服を着ていた。一方で、施設の理事たちはきれいに着飾っていて、いかにも金持ちそうだった。施設の子供たちと、その施設を運営する理事たちのこの対照的な違いは、外から来た我々に奇妙な感覚を与えた。

しかし、子供たちはとても人懐っこかった。初対面の我々にも遠慮なく笑顔で抱き着いたり、話しかけてきたりした。こんなことは日本ではありえない。子供たちは、人に気に入ってもらう術を体得しているようだった。なぜ人に気に入ってもらう術を身に着ける必要があるのか。それは寂しさによるものではないかと思う。親から離され、この施設で暮らす。会いに来ない親は多いと聞いた。この施設を離れる日、雨が降っていたのだが、いつもなら友達と屋外で走り回っている子供たちが、泣いていた。「家族に会いたい」―理由は皆同じだった。子供たちにはどこかに「捨てられた」という感覚があるのかもしれない。

その光景を見て、私は恥ずかしさと悔しさの混ざった何とも言えない感情を抱いた。実を言うと、この施設に来た初日、私は「ああ、家族に会えなくても、たくさんの友達に囲まれて笑っていられる。子供たちは、幸せなのだ。」と感じていたのだ。その日のわたしの日記には、こう書かれていた。「この場所は本当に汚い所で、衛生的にいい環境だとは言えない。けど、みんなすごく懐っこくて、笑顔で元気だ。子供たちにとって、ここはどんな場所なんだろう。…幸せなのかな。親にも会えないし、体にも悪い。（→少年たちは、水煙草を日常的に吸っていた。）でも 300 人の友達がいる。…幸せって何だろう。」

そして子供たちは、一緒に遊んでいると、常に何かを求めてきた。写真を撮ってくれと言ってきたり、お菓子や飲み物をねだったりしてきた。特に、飲食物をねだる姿

は、私に物乞いする人を思い出させた。食事はまずく、下水同様の水しか与えられちない彼ら。私と同い年の子でも、10~13 歳程度にしか見えなかった。ここは、社会に出て生きていけるようにするための学校なのだろうか、それとも生き場をなくした人たちを収容するような所なのか―最終的に、私はこの疑問を抱かざるを得なかった。

〈Fisher Village〉

「魚釣りの村」、Fisher Village。そもそも、なぜ彼らは水上に家を建てなければならないのか、その理由から書き記そうと思う。共産主義国家ベトナムでは、土地を所有する人は土地税を国に支払い続けなければならない。最貧層の人々は、土地税を払うことができないため、ドラム缶の上に板を並べて水上に住まいを設けているのだった。そして土地を所有しない彼らには、ベトナム国民としての ID カードが与えられない。したがって彼らは、安定した職に就くことも、パスポートを作ることも、学校に通うこともできずにいた。その現状に対して、SJ Vietnam というボランティア団体は学校を創設し、子供たちが学べる環境を作っていた。この学校のおかげで、Fisher Village の子供たちは拙いながら英語を話すことができたし、文字の読み書きも計算もできた。しかし、そんな現状を見て、フランス人の友人が私にこんなことを言った。「ここの子たちは、本当に頭がよい。ちゃんと教育が行き届いているね。でも、ID カードを持たない彼らは、まっとうな職に就くことができないのではないか。勉強をしても、彼ら一族の生活は改善されないのではないか。」

普段、Fisher Village に住む人々は、汚泥に等しい畑で作物を作り、子供たちを寝かしつけた後、親たちは川に架かる橋の上で、その作物を売りさばく。交通ルールが存在しないベトナムの橋の上は、多くの車やバイクが行き交い、大変危険である。排気ガスもひどい。そんな危険な場所で、露店を開き、命を繋ぐ彼ら。…この話を聞いたとき、涙が止まらなかった。泣くのが一番失礼で、いけないことだと分かっていたけれど。しかし、やはりみんな笑っていた。Hai Duong Welfare Center の子供たちが笑っていたように。

←貧しい人々の住む街は一般庶民が住む市街から、このような壁によって隔離されている。
この壁を超えることは容易であり、実際に市民も行き来しているものの、奥へ進むほど住む人の貧しさは増していき、その最も奥に川と Fisher Village がある。

３．おわりに

初めての一人海外 to ベトナムで、多くの不安とともに旅立ってから早一か月。ハノイにいた二週間は、信じがたい現実を私に突き付けた。そして、帰ってきて持った思いは、「何の役にも立てなかった」というものであった。私が子供たちに一週間英語を教えたところで、その子たちが英語をべらぼうに喋れるようになるわけではないし、ましてそれによって社会復帰ができるようになるわけでもない。一体、私は彼らに何をしてあげられたのだろう―。たかだか日本人の小娘一人にできることなんてほとんどないことは分かっているけれど、悔しかった。言語の壁、生活水準の壁、様々な壁を越えて得られたものは多く、しかしあげられたものは微々たるものであった。次は、次こそは。この反省を生かすべく、「明確な目標」と「常に自分に何かできるのかを問う意識」を持ちながら、ボランティアに参加しよう。こうして、人の役に立つ仕事がしたい私は、ボランティアにのめり込んでいく気がする。

〈ギャラリー〉

←ベトナムの家々には、国旗が掲げられていることが多かった。
Fisher Village の説明の最初の写真にも写っている。

←Fisher Village の夕暮れと、
畑の脇に落ちていた人形→

←写真が大好き。
なぜかポーズはハートマークが多かった。

塗り絵に英語を書いて、
プレゼントしてくれた→

←ベトナムの学校には、たいていこの写真が飾ってあるらしい。
ホーチミンと、社会主義の象徴、赤。

旧暦のお祭りの定番グッズ、五芒星と仮面。
巨大な五芒星と、300 個の仮面を作って、
子供たちにプレゼント。写真は五芒星→